

1939(昭和14)年～

1. 経歴・狭山市との関わり

入間郡高萩村(現・日高市)に生まれる。2歳の時に入間川町(現・狭山市)に転居、現在広瀬在住。12歳の7月、初めて作った短歌「夏の朝の空を光りつとんでいくジェット機小さし見る見るうちに」が『埼玉文芸』に載り短歌に興味を持つ。19歳、「アララギ」に入会する。

1960年、「アララギ」の若手仲間とアララギ学生会「ポポー」を創り、「アララギ」代表の土屋文明に傾倒していった。1969年にアララギ若手グループ誌『ポポー』を発行する。1976年、「現代歌人協会」会員となる。

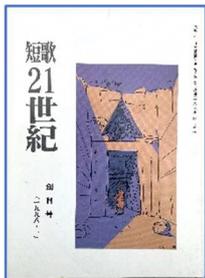
1990年土屋文明逝去の後、1991年、歌誌『アララギ』の選者、次いで編集委員となる。

1997年、日本文芸家協会会員となる。同年、『アララギ』が終刊となり、苦悩の一年を過ごした。翌1998年、小暮政次氏らと共に『アララギ』の後継誌『短歌21世紀』を創刊。編集・発行人となり、現在も務めている。また同年、『文芸狭山』編集長となり、現在は短歌選者として活動している。



2. 主な業績

【歌集・歌論集】合同歌集『貯木池』『騎』出版(1970～73年)。第一歌集『流速』(1974年)をはじめ、『夏山』『鯉の卵』『鷺頰集』『トリトニアの花』『わが愛する歌』『冬日』『春影』『天水』『雨下』など多数の歌集を出版。『天水』は「短歌新聞社賞」(2006年)を受賞。また、現代短歌文庫より『大河原惇行歌集』を出版。2004年には、歌論集『文明以後の写実』を出版。



【地域短歌会の創設及び講師としての活躍】

・1996年、狭山市「おもと短歌会」「ふじみ短歌会」「水野短歌会」等、また、所沢市や入間市にも短歌会創設。

・所沢市輩出の明治・大正の女流歌人「三ヶ島葎子の会」の会長となり、彼女の写真や短歌等をまとめる編集の責任者となる。また、1998年に始まった三ヶ島葎子資料室公開講演会の講師も務めた。

・「短歌21世紀」創設後、「埼玉文芸家集団」常任委員、「埼玉県歌人会」副会長となり、歌誌『短歌21世紀』の発行を続けながら全国で歌会や講演を行い、短歌文化の継承と発展に貢献している。「短歌21世紀」の活動として、メール歌会やオンライン歌会も始める。

3. 特筆

大河原氏の短歌は、日常の風景や人間の感情を繊細に捉え、写実主義の伝統を現代に生かした作風が特徴である。写実主義の精神を継承しつつ、新しい表現の可能性も模索している。

入退院を繰り返す父の仕事(鍼灸)を支えながら、鍼灸専門学校及び日本大学国文科二部での勉学に励み、また自身の短歌の世界も創り上げていった。

「生きて帰りて一夜の明けむ朝なれが凍る枝々に光るその雪鷺の影」 歌集『鷺の影』より

〈インタビュー〉富岡ヨシ子氏(おもと短歌会)〈参考文献〉歌集『雨下』『埼玉短歌事典』『埼玉歌集』他